

## 理事長のごあいさつ

## 普遍的なインフラとしての倫理 ～コスト・ベネフィット計算を超えて～



和歌山地域経済研究機構

理事長 **Nabil El Maghrebi**

(マグレビ・ナビル)

【和歌山大学経済学部長】

わたくしが、日本に来たのが1988年でした。日本政府の国費留学生として和歌山大学大学院経済学研究科に入学、研究活動を終え、修了した。その後、大阪大学大学院経済学研究科博士課程へ進学し、大阪大学に助手を経て、学位取得後に和歌山大学に赴任いたしました。当時和歌山大学で指導してくださった先生達はもちろん外国人ではなく日本人でしたし、わたくしも日本に来てから日本語を勉強しましたので、コミュニケーションは英語が中心でした。その中でも当時の先生達は一生懸命に私を指導してくださいました。彼らは、指導する際にコスト・ベネフィット計算を行っていないかと思うのです。

経済活動は人間社会の根源でもあります。したがって経済活動を研究する経済学も人間社会の様々な領域に裾野を広げます。そして限界原理、コスト・ベネフィット理論、サunkコスト理論など他領域(たとえば生物学)にも影響を与える汎用性の高い考え方を経済学は生み出してきました。教育経済学においても例外ではありません。投資ではなく費用としての教育、費用を回収するという考え方です。多くの国々の義務教育の考え方は国家として教育に投資を行うことで、その成果を国民全体にもたらすという考え方であることは皆さんも理解されていることでしょう。ドイツやイタリアなどでは義務教育のみならず大学にもその考え方が適用されています。

さて、人間が行う経済活動は人類が生み出されて以降続いてきました。一方でその活動に関する研究結果が影響をもたらすようになってきたのは、数世紀前だと思われる。それ以前にも経済原理は働いていた可能性はあります。人間のみならず動植物の活動でもそうでしょう。しかし経済原理が明示化され、影響力を持つことで、その原理以外の考え方の中で消失していったものもあることでしょう。そして必ずしもそのことすべてが否定されるべきではありません。経済学の進展は科学の進展と相互作用を持ち展開することで、今から考えると恐ろしい野蛮な考え方や空虚な妄想のようなものがその力を失うことで救われてきた人々もいるからです。一方で、経済学や経済的な原理の影響力に関する客観的・相対的な分析が必要なのではないかと学部長になってから強く認識しています。

来日する前にイメージしていた日本社会、敗戦後の暗闇の中から勤勉に復興してきたひとびとがいなくなっているように思います。これは間違いなく残念なことです。サunkコストとしての教育や短期的・身内のコスト・ベネフィット分析に拘泥するあまり、長期的・遠くの人々への思いやり、想像力を欠くことになってきていないでしょうか。これまで、日本そして和歌山地域に恩返しすることが必要だと考えるうえで、経済学を研究してきた今の私にできることは、投資としての教育のあり方、経済活動に

おけるリスクシェアリングと最も重要な普遍的なインフラとしての倫理の意味を再度皆さんに問いかけることのように考えています。他者への思いやりや想像力に基づき、新たなイノベーションの機会が生まれるかもしれません。また是非議論いたしましょう。